

令和2年度第2回平泉町総合教育会議

日時：令和 2年10月26日（月）

午前10時00分

場所：委員会室2

次 第

1 開 会

2 挨拶 平泉町長

3 協 議

（1）子育て世代における家庭教育について

（2）コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）について

4 その他

5 閉 会

令和2年度第2回平泉町総合教育会議出席者名簿

区分	職名	氏名
構成員	平泉町長	青木幸保
	平泉町教育委員会教育長	岩渕実
	平泉町教育委員会 教育長職務代理者	本澤京子
	平泉町教育委員会委員	山平功二
	平泉町教育委員会委員	三浦英子
	平泉町教育委員会委員	千葉義信
事務局	教育委員会事務局教育次長	岩渕嘉之
	教育委員会事務局教育次長補佐	千葉数馬
	教育委員会事務局主事	安倍雅人

令和2年度第2回平泉町総合教育会議会議録

日時：令和2年10月26日（月）

午後10時00分

場所：平泉町役場3階委員会室2

（岩淵教育次長）

皆様、改めましておはようございます。只今から、令和2年度第2回平泉町教育委員会総合教育会議を開会いたします。

最初に、青木幸保町長がご挨拶申し上げます。

（青木町長）

それでは、改めましておはようございます。今年度第2回目の総合教育会議ということになります。委員の皆様には、学校教育のみならず地域の教育活動、その他の活動に、お力添えをいただいております。心から感謝を申し上げたいと思います。前回は、コミュニティースクールの件、そして、前回というのは、去年の分になりますけれども、子育て支援について現場の声を聞きながらの情報交換ということで、いずれ新たに今年度、子育て包括支援センターの開設に向けてしっかり取り組みを示しながら対応して行く。そういう年ということで、大変委員の皆様には、多岐にわたって、情報を共有しながら、日々、開設に向けての努力をしていただいているところであります。今般は、限られた時間ではありますけれども、今後、私自身として、このままでは、どういう風に進んでいった方がいいのかという委員の皆さんにお考えを聞くにあたってですね、今後、平泉はこうある。この辺を力入れて行かないと、この包括支援センターの役割というのが、更に充実していくには、そういった部分もやっていかないといけないということを今日、若干、ご提案させていただき、今日、結論を得るということではなくてですね、それをまた聞いて、皆様のご意見もお聞きしながら今後、開設に向けてですね、議論をしっかりたたきながら、そして現場にしっかり対応できるそういうセンターの開設をして参りたいという風に思いますので、忌憚のないところをどうぞ、お話をいただきながら進めて参りますので、どうぞ宜しく願いしたいと思っております。いずれ秋口になって、寒さも若干出てきていますので、本年はコロナ禍の関係で特に、恐らく皆さん年齢はある意味では達したと思いますが、インフルエンザの予防注射もしっかりしていただきながら対応していただきたいという風に思っております。どうぞよろしく願いたいと思います。

（岩淵教育次長）

ありがとうございました。会議の全体の進行は私教育次長の岩淵が務めますので、よろしく願います。それから出席者につきましては、構成員名簿にございますとおり、本日は町長、教育長、教育長職務代理者、教育委員の3名の計6名ということになります。

それでは、3の協議ですけれども、協議の議事進行につきましては、岩淵実教育長が務め

ますのでよろしくお願いいたします。

(岩淵教育長)

改めましておはようございます。早朝からお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。それでは、座って進行させていただきたいと思います。今日の協議の柱は次第にありますとおり、子育て支援における家庭教育について。そして、コミュニティースクールについての2本立てということになります。時間は午前中ということですから、2時間弱ということになりますので、どの程度、深められるか分かりませんが、できるだけご意見をいっぱい出していただきながらまとめていきたいと思います。

まず、最初に子育て世代における家庭教育についてということですが、今、町長からもお話がありましたとおり、昨年度は、この子育て支援についてということで、1本のテーマで3回の総合教育会議を開かせていただきました。それで、第3回目まとめの会議の中で確認できたことを少しお話させていただきますが、1つは、子育て支援について言えば個別に相談できる体制づくりをしていくことが必要であると。そのためには、関係機関の連携が大事だと。加えて、家庭相談員といったような役割の方を要請していく必要があるであろうと。だいたいこの3点に絞られたのではないかなという風に思います。それを受けて今年度に入りましては、子育て世代包括支援センターを実のあるものにするということで、事務方でこれまで2回程の関係各課で、係が集まっての協議を進めてきているところであります。年度内には何とかこのセンターの動きが明確になって、そして進んで行くようにと考えているところであります。そうしたことを受けて3回目の最後の発言として、町長からは就学前教育というのは基本的に親なんだという風なことがお話されましたし、そういった親に対しての相談できる体制づくりという風なことも必要であると。そのためには、話が出ましたけれども、コーディネーターといったらいいか、役割を担う方を中心に対応できるような体制、スタイルを作る必要があるのではないかな。このようなまとめのお話もいただきました。それを受けて、今回は所謂包括支援センター、支援するという風なことどうするかという一步前の親の家庭での教育、家庭教育についての親の在り方というか、そういったことについて少し論議を深めたいという風なことであります。ということで、これからまず町長から、町長としての家庭教育、親指導と云いますか、そういったことについての想いをお話いただきますが、それを受けて委員の方々から、それぞれのお考えで、お話いただきたいという風に思っております。ですから、それぞれご意見のちょっとした差はあるかと思いますが、それを今日ここでまとめるということではなくて、それぞれの考え方を出し合いながら、これから先どうあればいいかということを経験者である我々も含めてですね、考えて参りたいということが1本ということになります。まず、それを前段にお話していただいて、2番目のコミュニティースクールについての、これは事務局から平泉町のコミュニティースクールの基本という風な、こういう風に考えたということで提案を提起させていただきます。それに基づいてお話をいただければと思っているところであります。大雑把ではありますが、そんな流れで進めていきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。それで

は、町長の方から最初の家庭教育についてお話をいただきたいと思います。

(青木町長)

それでは、時間は15分から20分程度になると思いますけれども、いずれ昨年ですね、子育て支援について、委員の皆様、その現場である学校、幼稚園、保育所と先生方も一緒に入れて情報交換等をひとみさんのところ。

(岩渕教育長)

適応支援相談員。

(青木町長)

適応支援相談員も入っていただきながら、現場の様子等々のお話をいただいたところがありました。いずれよく議会でもなんですけれども、子育て支援についてということで、質問、議論がありました。実際、子育て支援って、相対的にいうんだけど、何が実際にですね、支援って言えばいっぱいあるんですけど、何が現在本当に困っているか、これが受けられなくてということのをいろいろ分析していくと、例えば0歳児、1歳とか、2歳とか、3歳とかの段階で、町として0歳児、1歳児、2歳児といった時、1歳の時までには、このくらい子どもにはやってほしい。3歳だとこのくらいまでやれる。そういったものをしっかり持って、そして家庭で、子どもを持って、自分でうちの子ども、よその子どもと同じ2歳なら2歳、3歳なら3歳でも、うちのは、まだその辺もよく、3歳でもどのくらいやれるか分からないですが、例えばやれないという。果たしてそうなのかと。特に、何歳まではこれくらいと言っても、私はですよ。それぞれの個人差というのが、実はあるんでないかと。例えば、うちのは劣っている。でも本当に劣っているのか。でも親にすればそれを認めたくない。そういうのもあると思うんです。しかし、本当に劣っているのか。それが3歳、4歳、5歳まではいいけど、小学校に入ったらば、急に、物事が分かるようになったとか、自分のことを棚に上げていうのは、失礼ですが3年生、4年生までは、あまり訳が分からなかったけど、5年生、6年生になったら急に先生が言っている教科書とか、本とかが分かるようになってきて「お、勉強って面白いんだ。」と思って、明日は、ここまでというところがあるんですけども、まさに予習ですよ。それを次々とやっていった頃があったんですよ。笑い話みたいけど。1年生、2年生の時は廊下に立たせられていた、人間が5年生、6年生になったらやっと分かるようになってきたというように、ある意味、個性を磨く、育てると云いながら、案外、統一的に皆やろうとして、本当は、おかしい子でも、皆よりできない子でもなく、ただ発達段階が違う。そういうことも実はあると思うし、やっぱりしゃべれないとかそういう言語的なこととかいろいろ適応がしっかりしていないとかいうのも当然あるんだろうな。その中で、家庭の親にすれば、やっぱりこれがどうなるのか、直接どこに行ったら、それを教えてくれるのかな。うちの子はこんなことになったけどもとなった時に、どこへ行って話をしたらいいのか分からないというのを実は、町でも、従来は教育委員会は教育委員会、保健センター、町民福祉課、そして保育所などの施設では、幼児施設なんですけども、そういった対応はしてきた。しかし、別ではなく、例えば教育委員会だとか、今回の包

括なんだけど、一か所にそれをセットして、今、やっぱり悩んでいることは、今すぐ回答がほしいわけですね、家庭にすればですね。ですから、その体制をしっかり、今回作るというのが、ただその担当、担当で、その相談されたことは、すぐ答えられるそういう体制を作ってすぐ回答を出す。対応できるそういう、そうなった時に、きちっと対応できる、もちろんこういったことを町ではしっかりやりますよと。更に「これらを開設しましたのでこれやりますよ。」という窓口をしっかり作って相談できる体制を、対応できる体制をしっかり取るということが、今後大事に、更に大事になってくるだろうと。その時に、先日のコミュニティースクールの話の時に、あるPTA会長が「私たちは、やはり0歳児からしっかり預かれる場所があって、ですから安心して働ける。」という話を彼はした訳です。したら、一方で、あの時は、阿部さんでしたけれども、相談員の阿部さんですが、結局0歳児から、そうしてずっと手放して、手放してと云うか、夜は家庭に戻るのですが。それだけ、過信してという言葉は使わなかったと思うけれども、いずれそうして、やってきた家庭の親御さんたち、とくに親御さんたちなんかは、それに頼り切って、100%ではないわけですね。例えば、忙しければ、朝だって7時から7時半には家を出ないといけない。子どもだって6時半、7時には起きるわけではない。本来であれば、保育所に頼む時は、おしめは取り換えて、飯を食べさせて連れて行かなければならないのに、おしめも取り換える暇なく、そのままにして、ご飯も食ったのか食べたのか分からないようにして、そういった場合も実はあるわけですね。ですから、どこに社会行動にもそれはいろいろあるんだろうけども、片方では例えばそういった子どもたちが、いろいろ情緒不安定になったりするというのは、ある意味では支援員の言葉にある。ところが働く世代にすればそういう頼めるところがあると非常に安心して勤めに行ける。但し、勤めに行くから、逆に家庭でしっかり教えなければならないこと、家庭での責任というのが、非常に薄くなってきているのではないかという風に思うんです。特に、昨年3回にわたって皆さんで、情報交換した時に、結局、適応相談員が、今では、親御さんが、もう勤めに行って、子どもを要するに寝ている部屋まで行って、起こして学校まで連れて行ったり、起こしたりしてという。いや、それは行き過ぎではないかと思うんだけど、でも正直、今そこまでやらないとますます子どもはダメになっていくというお話です。ですから、支援員がやっていることは、間違いでも、何もなく、そこまでやっていかないと、そしているんな心の問題だという相談を受けているようなんですけれども、でも家の中のことはですね、私は正直言って、何人、先ほど教育長の前段での話でも、相談員の要請ですね。相談員を増やしてほしいという。逆に言えば、こういった支援員も、とても阿部さん1人で大変だからもう1人という人数を増やして対応する。むしろ私は、そっちの方が間違いではないかと。むしろ玄関から中は指導員が入るのではなく、やっぱり家庭の責任に置いてやはり学校に送り込んでいただかないと、私はむしろ家庭崩壊はもちろんですけれども、家庭崩壊していくという、地域も崩壊していくという、もの凄い危機感を持っております。そういった意味では、今回のこの包括的なこういうセンターを開設するにあたっては、今後、平泉学も影響してくんですけども、もっと平泉の教育は、家庭教育を家庭でどう云うことを

どう教えて行ったらいいのかということ。家庭は地域とどう私たちは子育てをしながら、自分たちもこの地域で暮らす以上、家庭として、家として地域との関わりとかですね。そんなことを教えなきゃ分からないのかと、思いそうですけれども、でもその辺は、俺も年取ったと思うんだけど、そういうことまで関わり方を地域でも教えて行かないとですね、それで家庭は、やはり稼ぐのは、確かに経済を求めるのは大事なことだと云いますけれども、でも自分たちの子どもが、今日、学校に行っただろうかと、学校に電話したり、阿部さんに電話して、聞く家庭は、現実がそうだって直接お話を聞きましたけれども、それは大変だなと。だけど、それだけでは結局ですね、阿部さんだって参ってしまうし、それだけでは対応できないし、むしろそういう学校環境だったり、地域環境だったり、家庭環境をつくり出している町、つくり出している町といえは私からいうと言葉おかしいですけれども、分かりやすく話をすると、やっぱりその辺をきちんと直していかないと、本当の意味で、つまり家庭教育をしっかりと対応していかないと、支援員の役割だったり、相談員の役割だったり、そして平泉学がですね、子どもたちばかりではなく地域に根差した平泉学ですから、子どもたちばかりではなく、公民館活動も平泉学、繋がっていつているわけですから、それをしっかりと保管していくためには、今回このセンターを開設する中で、もっと家庭教育を地域皆で見直していく、そういう1つの方向転換ではないけれども、相談員を増やせばいいとか、何とか言うのではなく、むしろ窓口を1本にしたからには、それを1本にして、そこにこそ、保健センターに頼んで誰かが担当するというのではなく、あくまでも私の今、今後こうするんだというまではまだはっきりはしていませんが、そこにセンターの職員ということではなく、その相談窓口がしっかりとした方を張り付けて、設置して、そして、例えば、これは教育委員会の関係だなとか、即そこに持って行って繋いですぐ答えられるとか。これは福祉関係だなとか、学校だなとか、これは教育委員会を通すけれども、学校に直接行ってちょっと聞いてみる。そのためには、学校でも家庭にこういうことやっていただけないとかですね。そういうことがきちっと対応できる。それが指導員が、今日は長島小学校だ。今日は平泉小学校だ。いくら身体があっても足りない、そのような現況を作っているむしろ町の方に問題があるという私から言うとおかしいですけれども、その辺を基本的に変えていかないと、だめでないのかなと私自身が思っていることであります。特に、今日言いたいのは、家庭で子どもにしっかりとこのことは家庭での役割と、もちろん小学校に上がっても中学校に上がっても子どもが成長する段階で、家庭の役割も変わってくるわけですから。やっぱりそのことを家庭での責任でしっかり。ただ、家庭だ、家庭だと、だから町が何もしないということではなく、小学校に入るまでにはこういうことをお父さん、お母さんとこういうことをやってほしいですよとかですね。かつては「学校で箸の持ち方を教えてくれない。」と言う人があったんだけど、「箸の持ち方くらいは家で教えないといけないんだ。」と言ったことありましたが、まさにそういう世代が変わってきていることも事実ですので、やっぱり家庭でしっかりですね、あるべき姿をしっかりと相談されるもの。やっぱりお父さん、お母さんここはしっかりと対応していかないとだめですよとか。ここもって個性を伸ばしてあげるためにも

がんがん言わないで少しこういう風にした方がいいんじゃないかとか。というようなことをですね、家庭で子どもとの関わり方というのをもっと親御さんたちにもしっかりしてほしいし、それを町で相談を受けた時はしっかりそれを回答できるような、どの年代であってもです。やっていくその選択はやはり親御さんたちがしていくという部分を町が選択する。指導員が選択するのではなく、やはり家庭がそれを選択して、相談して、そして親の責任でやる。そういう家庭であり、地域社会を作っていくというのが、今後の町としての平泉学を更に発展させていくためにですね、その部分が必要なだろうと私自身がそう思っております。ちょっと取り留めない訳が分からない部分は、これからの議論の中で、こういうことを言おうとして言っていたのですよと、議論の中で言い訳もさせていただきながら話を繋いでいきたいと思っておりますので、率直な委員の皆さんのお考え等もお聞きできればなというように思います。先ほど、教育長が言ったように、今日結論を出すということではありません。あの時、貴方こういうこと言ったじゃないですかとそういうことを追求する考えもございませんので、どうぞそういった意味で忌憚のないところを今後詰めながら進めていきたい。そして、開設に向けてですね、より良きものを町としての軸である平泉学を中心に据えた、まさに教育テーマであります家庭教育の在り方ということは今後しっかり取り組んでいきたいなという想いで、今日はお話させていただきました。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。早い者勝ちでいきたいと思っております。今の町長の話を聞きながらですね、自分なりの考え、頭の中で思い巡らせたと思っておりますので、どなたからでもどうぞ。時間ももったいない感じがしますので、間を空けずにいかがでしょうか。

(山平委員)

町長のお話の中に、家庭の責任が薄くなっているという話があったんですけど、まず、よく聞こえてくるのは、子どもに言い聞かせても言うことを聞いてくれないといったのが真っ先に聞こえてくるんですけど、親はどうしているかというところ、そこで何とかできていけば解決するのでしょうか、何もできなくて折れてしまっている。いわば諦めているというところがよく見受けられます。そういったところで、うちの場合は、おじいさん、おばあさんがその頃いて、アドバイスをいただいたり、支援してくれるところがありましたので、非常に助かったなという気がしているのですけれども、家庭での構成にもよるとは思うのですけれども、だれか身近にアドバイスしてくれる人がいるのであれば、非常に家庭の中でも、もっとうまく円満に解決する方法が導き出せてるのではないのかなという風に思いました。

(千葉委員)

はい。それでは、子育て世代包括支援センターのお話は私は今年からなので、聞いていなかったのですが、その話を数馬補佐から昨年度の会議資料を全部いただきまして見させていただきました。最終的には、子育て世代包括支援センターは実施するというところで、そのやり方と問題等がかなりの内容で書かれておったところは把握したところです。ただ、子育て世代包括支援センターそのものの話から私は勉強しないといけないと思ひまして、国の指針

を全部見たのですけれども、その中でここで提言しているのは、先ほど、ちょっと教育長の方から若干の話は聞いたのですが、平泉町としては、国に言っている就学前までのことだけではなく、その後についても一括したかたちでの子育て世代包括支援センターの役割を作りたいというお話を聞いて一つ思ったのが、まずは国の指針にもあるのですが、今ある、先ほど町長もお話をしました各担当が違うところを繋ぐ役目を子育て世代包括支援センターでやりなさいと言っているんですね。国では、なので、いかなる相談事も、そこで一回受けて、それから町の中でどこに相談したらいいかということその包括支援センターの方とか、何と言っていましたか、アドバイザーではなく、そこに置かれる役職の方がそこを所謂一人と限らずそこにいる方がどこに相談したらいいのかということをおアドバイスするところを担う箇所であるという風な言い方をされていたので。なので、平泉町としては包括支援センターを場所として置くという風な考えよりも、いろなところを繋ぐ役目として、今、実際にある課なり、保健センターなり、大きく言えば学校、幼稚園、保育所、それから公民館とかですね、そういうのまで全部含めたかたちでのまとめをする。まとめという言い方は変ですが、繋ぎをする部署をつくるんだらうなという風に思いました。それであれば、特別アドバイザーになる方、その方を選出して、今あるところを繋ぐんですよということで、各課なり施設なりというところからの代表者が構成員となるようなかたちでつくってあげれば、それはいいんだらうなという風に思いました。それから、一番の問題は家庭教育も町長がお話した中にもあったのですが、今もの凄く希薄になっているというのが昨年度の議題、議事にもいっぱい載ってましたけど、繋がりでですね。そこをどういう風に平泉町としてという風なことができるのかということが非常に難しい問題で、民区なりという風なところで、近隣なりというところで、核家族も進んでいて、所謂民区の活動にも参加しないところか、民区にも入りたくないという家庭が多くなってきている中で、岩手県ではないですけれども、他のところでは、民区の会費が月60万円とかですね。そういう風なところも出ていましたし。なので、そんなに払うのであれば当然、入ることができませんよということが出ている日本の国の中ではあるわけなので、そういうことはないでしょうけども、そんなところは今のところ聞いておりませんが、その家庭での教育という時にどこまで他の人が入って行けるかということが実際問題として、当然、私も町長と同じように悪いことすれば小学校の低学年となじなくても高校生、中学生になっても隣の親父から怒られたとかですね。「そんなことすんでねえ」とかですね、いう風なことが平気で言われる時代に育ってきた人間からすればそんなことはないと思いたいのですが、実際にはそうではない。逆に小さい子が、間違っただけをした時に怒れない状況にあると。「何、余計なこと言っただけ。」という風なことを当然言われたり、そんなことがある中で、果たしてどのようなことが平泉町として家庭教育の中までのことができるだろうかというのが、非常に疑問視されているところで、ただ、どんなかたちか知恵を絞ってでもやらなければならないところが分かっているのですけれども、そのあたりのどういう風なやり方をすればいいのか。実際問題、私のは案がないところなので。是非、良い案を見つけて何とかそれはやるべきなんだらうなと思いました。取り留

めなくて申し訳ないです。

(三浦委員)

私もまだちょっと考えが、まだどのようなお話をしていたらいいかまとまらないんですけれども、昨年度、保健センターに地域包括センター、コーディネーターの方が配置されたということをお聞きしていますので、そのコーディネーターの方が現在、どのように活動しているのか、関係機関と何か子育てのことで相談があった時に、保育所であれば保育所に、幼稚園であれば幼稚園にという風に連携を取っているのかなという風に思います。その現状は把握していませんが、そのように何か問題が起こって相談した時に、ここに行けばいい。ここに相談に行けばいいという窓口がはっきりしているのであれば、それは凄く有難いと思いますし、そのコーディネーターの方がある程度権限を持っている必要があるかなという風に思います。先ほどの町長さんのお話の中で親御さんが安心して預ける場所が必要だという保護者の方のお話で、それはその通りと思います。まずは、安心して子どもを預ける場所があると。ただ、親と子の関わり方というのは預けるということとはまた別ですので、どんなに忙しくても時間がなくても親としての心構えが必要という風にまず思うわけで、安心して子どもを預けていて、身体だけでなく、心も他人に預けているうちに大きくなって取り返しのつかなくなるというのが、今の社会の中ではいっぱいありますので、親には親としての指標というか、親と子どもの関わり方の指標、0歳児であれば目を見てお話をする。だっこしてあげる。何か月になったらこうする。ああするのような、何か指標がないと親はどの程度、何歳くらいまで。何か月くらいまでどうやっていったらいいのかというもの今指標がまったく分からないのではないかなと思うんですね。前はおじいちゃん、おばあちゃんがいて、一緒にいたので見て覚えるとか、聞いて覚えるということがあったのだけれども、小学校に入っても、まだ子どもとこうやっているとか。いつからどの程度離してやったらいいのか分からないというのもあるので、親と子の関わり方の指標というのもある程度作ることが必要かなと。若い親御さんには必要かなと思うのですが、それは一体どこで作るべきなのかというのも、ちょっとはつきり分からないんですけれども、子どもがある程度このくらいまでにはこれができるようになるというのは、本澤先生の前にそういうのも出ているし、保育所や幼稚園ではあると思うんですね。何か月くらいまで、何歳くらいまではこの程度のことができるという指標はあると思うんです。もちろん個人差があってもいいので、焦る必要はないし、比べる必要はない。ということを保育士さんたちなり、先生方が、親御さんにお話をしていく必要はあると思いますが、ある程度の指標があった方が、親御さんは子育てについては分かりやすいのかなという風に思います。その焦る必要はない、比べる必要はないという部分では、やはり保育士さんとか幼稚園の先生方、学校の先生方が子どもの成長ということで研修をしたりしながら、それも一つの研修の在り方としては必要かなと思います。町がということではないけれども、それも子育ての一つかなと思います。親御さんについては、やっぱり忙しかったり、時間がなければ、心もやっぱりなくなっていくので、時間も本当は家庭に必要なと。親は早くではないけれども、十分に子どもと関わり合えるよ

うに家庭生活も大事にできるくらいの時間も必要かなと思うので、それは働き方改革等の方面かなと思います。あとは親御さんが気軽に相談できる場所。先程、地域包括センターのコーディネーターさんとか、関係機関、町民福祉課とか教育委員会とか、そういう窓口がはっきりしている。というのも必要だし、あとは気軽に相談できる地域社会、お母さん方の集まりとか、お父さん方の集まりとか、家庭同士の集まりとかでも、割とうちの子はこうだとか、ああだとか、こんな風にしてるとか。いうことで、親御さんにも心の余裕ができるかなという風にも思います。今は、子どもと親との関りが凄く密接で、もう対等のレベルになってしまって、何か自分の子どもというのと、本当に対等のレベルになってしまって、切羽詰まりながら子育てをしている方もいるから、ある程度、心に余裕を持って、ちょっと自分の子どもも他の子と同じような、余裕を持った見方ができていて、少し長い目で見ようかなというような目が持てるためにも、誰かと話す必要があると思うので、地域社会の中でできることというのは、地域社会のまとまりを何とか作っていく。そのためには先ほどこれから話題になるコミュニティースクールというのも一つの手段だと思います。地域社会のまとまり、それから、包括支援センターなどの相談の窓口がはっきりしていること。それから、何か子どもの成長、親の子どもとの関わり方の指標、子どもの成長と親との関りの指標、2つの指標がある程度目安に必要なと。ただ、どこが作るかとなると、これはまとまりませんがそういう風に思います。平泉の特徴として、そういう風に系統的に就学前から、それから大きくなってからも系統的に子どものことで悩みを抱えている親御さんの窓口がはっきりしているということは、凄く大きな特徴で凄く親御さんにとっては、有難い特徴かなという風に思います。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。本澤委員さんお願いします。

(本澤委員)

3人の委員さんがもう仰ったとおりの出尽くしたという感じであれなんですけど。すべて私も賛成意見なんですけど、1番まず町長さんのお話を今日、じっくりと伺っていて、やっぱり、今までいろんな総合教育会議も実は去年3回積み重ねてきましたけれども、このテーマで。実はその前、平成29年の総合教育会議から、29年にも就学前の子育て支援の充実についてということで協議をしているんですね。それをまとめて数えてみると、7回積み上げてきて、昨年、最後の町長さんが仰っていましたが、何をやっていけばいいんだというのは、段々もうはっきり見えてきて、もうそれを実行するというか、出向、行政にでると出向というのでしょうか。もうやっていく。要するに包括支援センターとか、そういうことに向いているはずなんですけど、町長さんも29年の時に私が提案した各1歳ごとの目標段階の指標みたいなのをもうすぐ早く、すぐ即作って手引きを作って渡すべきだと思いますと町長さんが発言してくださっているのは平成29年です。ですから、それから何年も経っていますし、とにかく早く、一刻も早く親を育てていく場所。それから方法、どんな活動したら親は育つのか。実は昔のPTA活動とか、学校の例えばPTA活動にも学校全体のPTA

と各地区のPTAとありますよね。各地区何かでも随分充実した活動が子どもたちがいろんな体験をして、いろんなことを経験して、いろんな技を身につけていく場が、例えば、夏休みの海水浴だとか、そういうのにも学校の先生方もちゃんと各担当者がいましたから。各地区に。一緒に参加して、私も陸前高田の昔あった海に今はなくなりましたが、一緒に行ったことがあるのですが、勤務していた学校さんのPTAと。そういう場があって、その場で何気なく親が会話したことや他の保護者さん同士で、そういう中から親も育っていくと思うんですね。だから、そういう場、あとは行政の方からいうとそういう事業を整えてあげる。要するに環境、親を支援する環境をどうやって整えていくかということが一番大事のような気がします。本当に今のお話の中にも出てきましたけれども、おじいちゃん、おばあちゃんたちがいた頃は、本当に親御さんは助かっていたと思います。山平さんのお話の通り、父親、母親の役割をちゃんとおじいちゃん、おばあちゃんがやってくれていたんですね。それが今は核家族化、例えば、現実には、私もおじいちゃんから悩みを打ち明けられたり、地区懇談会の場で発言なさったおじいちゃんがいたのですが、「どう孫に接していいかわからないし、自分の出番は無くなってきているんじゃないか。不安でしょうがない。」とか。やっぱり、お孫さんが良い方向に育ってほしいという願いは、祖父母の皆さんは持っているわけで、そういう悩みを聞く場、時がありました。その要因はやっぱり核家族化。父親、母親側のおじいちゃん、おばあちゃんの育て方はちょっとやめてというような、今の時代に合わないよというような、俺たちは俺たちの子どもだから、俺たちの方法でやるから手は出さないでくれということも出てきているのではないかと思います。だから、そこら辺が。じゃあ、誰が、どこがそれをやってあげるかというのが一番大事で。それはやっぱり大きく考えると、社会教育全体の中でできるんじゃないかと。ということは、つまり、それは行政の例えば、公民館だとか家庭教育学級というのがあるんですね。本当はね。ただ、現実には本当にそういう親御さんたちがうんと成長してくれる場になっているかどうかというのはちょっと、ややマンネリ化的な感じもあるし、例えば、学校現場に任せてしまって、公民館の事業なんだけども任せてしまっている部分もあったり。そういうところをもう一度、行政側としてはしっかりと。あとどこどこでやれるんだろうかなというのが包括センターも含めてですけど、やっぱり早急に、早く実施していきたいなと。議論ばかり続けるのではなく、即行動、アクションを起こしていかなきゃならないなと感じます。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。一巡しましたので町長皆さんのお話を聞きながらお願いします。

(青木町長)

結局ね、結局ねという言葉は悪いんですけども、まず動いていかないと。始めていかないと何も課題も、今、本澤さんが言ったように、すでに言っている。すでに言われていることだと言っている。その通りなんですよ。つまりそれをとにかく動き出していかないと、課題も方法も中身も見えてこない、正に机上の議論だけになってしまうから、とにかく開

設して、ずっと話を聞くと、とにかく動き出さないといろんな課題が見えてこないという風に率直に思っております。そういった意味で、先ほど三浦さんが仰ったように、親がそのことをしっかり感じてもらわないとですね、「町でやるんだって。」とかですね、どんな方法で家庭を教育するのか分からないけども、町で家庭教育をもっと充実させるようなと言っているんだけどもなんて言っているようじゃだめなんだよね。要するに、「町のことではなく、貴方のことですよ。」つまり貴方のことだと。自分自身それぞれ皆なんですよね。その子どもがいる家庭だけではなく、あるいは地域社会でいけば、俺の孫も子どもたちもおりませんけれども。でも、地域には隣の子どもたちもいるし、そういつて関わる家もあるわけですよ。自分たちの家にいなくても。だから、家庭に子どもたちがいる家庭だけが家庭教育というのではなく、自分たちそこに一緒に地域で暮らしていれば、じいちゃん、ばあちゃんのところだって、隣の子どもだから、何、隣の子どもがどのように育とうと俺達には関係ないということではなく、隣にじいちゃん、ばあちゃんがいれば。例えば、隣のじいちゃん、ばあちゃん世話になったり、やっぱりそういった地域の関わりをやっぱりしていく。そして、そのお父さん、お母さん、逆に言えばじいちゃん、ばあちゃんでも隣の子どもたちこういうことやってたんだけども、だけど、今そうなのかなと。例えば、保健センターに来たから今日聞いてみようと思うよ。今、昔と違うとよく言われるけれども、本当にそうなのですかとか。例えばですね、そういう年代の方も保健センターに来て、そこに指導員というかコーディネーターという人居ますから、そして、その人に直接その方が答えれることと、現実的なことになると、現場のことになると、ちょっと教育委員会繋いでいずれ夕方までとか、明日までには繋がりますからとかですね。やっぱり即対応できる。特に家庭なんかは1週間、10日いつ答えてくれるのか、この間、町民福祉課に行って相談したけど、いつになったら答えが来るのかというような。今まであったということではないですよ。そういったことはやっぱりしっかり対応できる。即対応できるそういう現場を、センターを果たして行かないとだめなのかなと。そういうセンターを開設して行くと、本当の意味でのどう動き出していくかという風に現段階では思っています。以上です。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。一巡したわけですが、次のテーマもあるわけですが、もう少し言い足りなかった。これに触れておきたいという風なお話があればお願いします。いかがでしょうか。

(本澤委員)

今回の1番、教振ですね。平泉の家庭教育10か条というのがはっきりと出されて、「ああ、これ良かったな。」と思いました。こういう風に、まずどんどんと家庭に対してノックをまず一発していくということ、凄くいいなと感じました。我が家のルールをまず決めてみるとか、表になってあるんですよ。前、私もちょっと現職時代も厳美小学校で、我が家の家訓、と昔は各家の押し入れ家訓はこうだという。この間も平泉小学校さんのメディアの講演を聞いた時にも、よその家もやっているから、うちもこうしてくれと子どもが要求するけど、

うちはこうなんだよと。よそのうちはそうであってもうちは違うんだよと。その家がしっかりと持っているもの、子育ての指標みたいなもの。そんなのがやっぱりあると随分違うんじゃないかなと。自信がつく。親が。これ凄く良かったなと思いましたので、これがどういう風に、今後反映していくかは凄く期待していきたいです。

(千葉委員)

今、本澤先生のお話もあったのですが、実は一番問題は、私が思っているのは凄くいいものを配付したり、渡したりするのですが、それで終わるんですよ。なので、せっかく出したんだからこそ、それについてとか、それを使ってとかっていうのをそれぞれで、みんなそれぞれ出してもらいたいです。要は次のそれは各家庭に行ったでしょうから、学校ではそれについてとか。あとは教育委員会からは、今年はこのように発信しているので、それについて公民館活動の中でもどのようなことをしますよとか、そういうことを是非、何度もそのせっかく良いものを出しているのを、それを注目させるような手立てを少し取って行ってほしいというのは思っていたところです。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。その他、いかがですか。よろしいですか？

ちょうど1時間近く経ちました。ということで次のテーマに移る前にまとめになりませんが、お話を聞いて何点か論点、これから考えなければならないこととお話させていただきます。1つは親としての役割。或いは責任をどう果たせるような親を育てるか。家庭教育をお願いするかということだと思のですが、1つは例を申しますが、幼稚園の園長先生からだいぶ前だったと思いますけれども、お母さんが朝おしめも取り換えずにおしめバックを持って駆け込んで来ると。「お願いします。」と。そうすると幼稚園では、まず朝、おしめの取り換えからやることになりまして。これでいいんでしょかねと、園長先生にお話されました。つまり、朝忙しいんだろけども、親として果たすべきことは、何かということを考えさせる場もなければならぬのではないかなという風なことです。昨年度に、保健センターでは、子育てのコツを学ぶペアレントプログラムというのを出しています。そして、2回に渡って講座を開設して、その中には「こんな方におすすめです。」と子どもを叱ってばかりいるとか。言うことを聞かなくてイライラするとか。関係がうまくいっていないと感じるとか。一生懸命頑張っているのにという風な方におすすめですと。確かにそうしたことで親が大変苦勞している。どうしたらいいかということなのでしょうが、私、さっき幼稚園の園長先生の話をしたら、もっと以前の事柄で、できないでいるという親たちがいるのであればそれを啓発するというか、そういう風なことを考えていくことがまず第一に大事だなと。そのことは三浦委員さんが話をしました親との関わり方の指標が必要だということで、そういった中身は何が必要か、そういうことを整理するという風なことが、これは本澤委員さんからも前にテーマは資料として出されているのですが、改めてそういった部分について、親として必要なものは何かそういうことをもう少し考えてそれを提起するという場が必要かなという風なことが1つ感じました。

もう1つはセンターの役割という風なことです。あくまでも、そのセンターは所謂コーディネーターとかアドバイザーという立場で、そういう役割を果たさなきゃならないと思います。ですから、何かしてあげるとかということではなくて、まさに支援というのは相談にのるとか、指導的な立場でもって接するという風なそういったようなことだという風なことを繋ぎ役としてという風なこともあります。そうしたようなことを考えていく場という風な捉え方もしっかりしていかなければならないのではないかと。それが関係各課あるわけですが、そういったところが連携しながら、発達段階に応じて関わっていく。繋いでいく。バトンタッチしていく。1人の子をずっと見守って行くという風なことになるかなとそんな風に感じたところでもあります。お話をされたこと多岐に渡りますので、またここで整理できませんけども、事務局に持ち帰って、記録をもう一回見ながら、柱ということを考えていきたいなと思っております。包括支援センターのメンバーには、教育委員会のメンバーいませんので、あと町民福祉課、保健センターはありますので、そこで話されたことをもう1度その場で話題提起というか、問題提起をしながらということで、関わって参りたいという風に思います。

それでは、後半は、2本目の今日の協議議題でありますコミュニティースクールについてということで、話を進めさせていただきたいと思っております。第1回目には、県教育委員会の方に来ていただいて、学習会というそういう風なことで、PTAの会長さんとか、学校の校長さんとかにも入っていただいて、勉強する機会を持ちました。それを受けて教育委員会の事務局で、平泉としてのコミュニティースクール、その姿ということで、こういう風な考えではどうかということで、たたき台になるものをまとめました。それについて、今日はお話をさせていただいて、あくまでこれはまさに大きな体系でありますので、それから具体的に令和4年ですからあと1年半弱の中でどういう風な組織にしたらいいかとか、いう風なことも入っていきますので、今日はその前段の前段の基本的な部分であります。それを説明させていただきますので、それでもってご意見をいただきたいと思っております。それでは、担当の安倍の方から説明を。

(千葉教育次長補佐)

それでは先に私の方から。前回、第1回目の総合教育会議の際にコミュニティースクールという形で、県の担当をお呼びして勉強会と云いますか、ご説明をいただいて、いろいろ協議したところでありますが、本日の基本目標ということで資料をお示ししているのですが、その前にコミュニティースクールについて、もう一度、簡単にではございますが振り返りと云いますか、コミュニティースクールというのはどういうものかということで、私の方から簡単に説明をさせていただきたいと思っております。それで、こちらのパンフレットをお開きいただければと思います。コミュニティースクールにつきましては、学校と保護者、地域の皆さんと共に知恵を出しながら、学校運営に意見を反映することで、一緒に共同しながら子どもたちの豊かな成長を支えて、地域と共にある学校づくりを進めるというようなかたちで法律に基づいた仕組みであります。このコミュニティースクールの委員には、保護

者、PTA、地域の方々であったり、地域教育コーディネーターだったり、学校評議委員など学校や地域の実情に併せた方々の構成が考えられるのではないかなというところであり、また、それで、コミュニティースクールにおきましては、学校運営に地域の声を積極的に活かして、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくということができるというかたちになると思います。そして、このコミュニティースクールの学校運営協議会の主な役割ということで、校長が作成する学校運営の基本方針を承認する。学校運営について、教育委員会または校長に意見を述べるができる。教職員の任用に関して教育委員会の規則で定める事項について、教育委員会に意見を述べるができるということでの3つがあるところであり、それで、国におきましては、社会に開かれた教育課程の実現に向けてということで、学習指導要領の改訂とチームとしての学校づくりは、教員の資質能力の向上等学校教育を巡る改革の方向性や地域組成の中で、学校と地域の連携、共同の重要性が指摘されているところであり、それで、そのコミュニティースクール、学校運営協議会制度の導入につきましても、平成16年から議論されて、平成29年3月にはコミュニティースクールの設置が努力義務化されたところであり、これらの国の動向を受けまして、当町におきましても、これまでのそれぞれの取り組みを活かしながら、平泉町版と云いますかコミュニティースクールを令和4年度の導入に向けて検討を進めているというような状況であります。それで、平泉の目指す方向性と云いますか、基本目標というような形で、続きまして、こちらのカラー版のチラシとそれに関わる説明につきまして担当の安倍からご説明いたします。

(安倍主事)

それでは、担当の安倍から説明をさせていただきます。座って説明いたします。資料は主にこのイメージ図の方をご覧くださいながらお話を聞いていただければと思います。教育長のお話にもありましたが、今回ですね、第1回目の総合教育会議、学習会を経まして当町としての具体的な考えのたたき台として作成したところであり、今回の委員の皆様からも忌憚のないご意見をいただきまして、今後の導入に向けて参考とさせていただきますのでよろしくお願いいたします。まずはイメージ図のところについてですが、前段の補佐の説明でもありましたが、まずは社会に開かれた教育課程の実現というところもありまして、子どもたちを取り巻く環境や学校が考える問題が複雑化、多様化しております。教育改革地方創生等の観点から学校と地域の連携、共存の重要性が指摘されている中で新学習指導要領の改訂では開かれた学校から一歩踏み込んで地域でどのような子どもたちを育てるか。何を目指し実現していくのかといった目標やビジョンを共有するために、こういった社会に開かれた教育課程の実現が必要だと言われております。平泉町ではこれまでも県で取り組んでおります教育振興運動ですね。それを土台としました岩手型コミュニティースクール、そういった趣旨に沿うかたちで地域との連携活動が盛んに行われてきたといった経緯があります。しかしですね、こういった取り組みは全町的なものは盛んであるものの各学校が個別に抱える地域との連携組織が複数あったりとか、そういったことを通して学

校の担当者に過重な負担がかかったりですとか、地域と学校、運営方針が個々の学校が抱える課題、連携共同の意識を共有することが不十分であったりというような状況が見られるところであります。そこで、平泉町としてこれまでのそういった地域との連携、協力活動を基礎とした学校運営協議会を組織しましてコミュニティースクールを導入する。そういったことで社会に開かれた教育課程に向けた実現の取り組みを推進していきたいと思っております。このコミュニティースクールを効果的に機能させることによって、学校運営協議会や熟議の場を通して学校や子どもたちが抱える課題、目指す子どもの姿、目標やビジョンを共有し、今までの依頼する、されるという地域と学校の関係から、地域が学校のパートナー、学校運営に積極的に参画する応援団として、当事者意識を持ち、役割分担をすることで連携共同による取り組みがより一層充実させることができると考えております。更にこういった取り組みと併せて各学校の特性を踏まえまして、子どもたちの発達段階に応じた組織的、継続的な共同体制を構築していくと共に、今までの既存の取り組みですね、地域学校共同活動、地域活動、各学校の教育活動、そして教振の実践区活動、全世代型平泉学の取り組み、こういった取り組みを総合的に且つ一体的に推進していくことで、地域と共にある学校づくり、学校を核とした地域づくりの実現を目指して、社会総掛かりでの、ゆくゆくは平泉町の将来を担う人材育成に取り組んでいくというものを基本目標として考え方の土台として考えられるのではないかと考えております。こういった取り組みが、まずはひいては人材育成に繋げて町の将来のまちづくりにも繋がっていくことを期待して、平泉町としてはコミュニティースクールを取り入れていきたいと考えているといったところであります。基本目標の考え方、具体的な大枠のところなんですけど、こういったかたちで、実情に応じたかたちでコミュニティースクールの導入を検討していければと現状では考えております。あとはコミュニティースクールに向けた今後の取り組み、見通しのところなんですけれども、資料にあります、まずは先進事例、学校、すでに取り入れた自治体とか、学校さんのところを参考にしまして、こういった流れが考えられるのかといったところをまとめております。具体的な月次等のスケジュールというのはまだ詳細は決定していませんので、こういったところが今後想定されていくのではないかなど。全部が全部できるというよりは、可能な限り、こういったところをポイントで絞って取り入れていって、平泉町としてのコミュニティースクールの導入に向けて検討を進めていきたいと考えております。簡単ではありませんけれども、基本目標についての説明は以上になります。

(岩淵教育長)

今、担当から報告を提起させていただきましたけれども、前もって委員の方々にはこのペーパーについては郵送させていただいておりますので、何か疑問点、或いはこういったのはどうなのかということとかですね、どの点からでもいいですのでご質問等あればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

(三浦委員)

平泉町の場合は、全世代型平泉学が定着していますし、教育振興運動もかなり盛んに行わ

れてきた背景もあります。各学校ごとに地域の皆さんが、学校に協力しようという体制も整っていましたので、スムーズに移行できるのかなと思います。細かいことはこれから各学校ごとに人選とか、具体的な活動の内容とか、長になる方、役員はどのように選ぶとか、それは各学校ごとでこれから学校区ごとに話し合いをしていくかとは思いますが、イメージが平泉の場合は凄く湧きやすいなと思っておりました。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。その他にいかがでしょうか。

(千葉委員)

それでは、これを見てですね、これはこれで正しいところ、いいところでまとめられていると思います。最終的に平泉町としては1つの団体にするのか、それとも3つに中学校、小学校それぞれで3つ作るのかという風な最終的なものというのは、まだ何も考えていないとか、まだ決まっていなと思います、考えていないところなんでしょうか。

(安倍主事)

まだ、こうだという具体的な指針自体は決まっていなのですけれども、1回目の学習会の時に県教委の方も触れていたとおり、全町にするにせよ、各学校それぞれに組織するにせよ、個別の事案を話し合う機会、時間をつくるのが大前提となってくるかなと。例えば、全町で1つの協議会を組織することによって、取り組み自体の共有は、結構しやすくなって、その時点ではいいかなと思うのですが、そういった学校ごとの個別ケースその場合は、例えば分科会として設けて話し合う時間を作るだったりとか、逆に各学校に組織していく場合については、そういった各学校のケースについては充実して話し合う機会は作れるとは思いますが、そういった取り組みを共有できるような時間は作っていかなければいけないと考えておりますので、どっちにせよそういった体制を構築していくことを前提に今後検討していくこととなります。

(千葉委員)

それを受けてちょっと。私としては、意見だけここで述べたいと思ってはいたのですが、実は本音を申し上げますと、平泉町で3つ作るとなるとかなり人選に迷うだろうと。それから、非常に兼任が出るのではないかという風なことも実際にはありますので、今、事務局の方から出たような中身でできるとすればですよ。所謂1つ作って、その中に分科会的に各学校のものを作っておくという風なのが、非常に実質的と云いますか、やるのには非常にいいのではないかと思うので、是非そういう方向でいていただきたいなという意見です。

(岩淵教育長)

はい。具体的な組織立てのことについてのご意見だったと思いますけれども、その点について、また、それにとらわれずに別な視点からでもいいのですけれどもご発言願います。

(山平委員)

私は、どちらかという、学校区別ごとの方がいいのかなと思うのですが、例えば長島小学校のことについて、平泉学区の人たちがどれほど分かっているかという

のが出てくると思うんですね。その学校の中の課題については、その学区でないとなかなか共有できていないところもあると思いますので、学校単位で町P連という組織がありますけども、そういった意味でいうと包括的な上位組織みたいなもので情報交換とかはできると思うんですね。なので、コミュニティースクール自体は学校単位の方がもしかするとことを進めることにはやりやすいのではないかなと思いました。組織に入る人もおそらくその地域の人たちなんじゃないかなと思いますので。私の意見でした。

(岩淵教育長)

分かりました。ありがとうございます。

他にいかがでしょう。本澤委員さん、いかがでしょう。

(本澤委員)

今の意見はやっぱ悩みますね。それぞれの良さが。千葉委員さんが仰ったように、人材の確保がとにかくとにかくダブル方、「はい。仕方ない。兼任しましょうか。」っていう本当探るのが大変になるかなと思いますし、その分科会形式みたいな、或いは平泉小学校部会みたいな。あと長島小学校部会みたいに置けば大丈夫かなという部分もありますし悩みます。山平委員さんの確かに各校の特性があるので、長島の地域、平泉の地域、正直言って何て表現したらいいかな。温度差みたいなのが地域の方々の意識が温度差みたいなあると思います。それを埋めていくというか、啓蒙してお互いが良いところを見習い合ったりしていくためには一括全体がいいのかなとも感じますし、それぞれ山平委員さんの長島のことがかかってもらえるのかというちょっと心配な部分も仰ったんですけども、それを逆に捉えて理解し合いながらやっていくみたいになると、例えばアピール、コミュニティースクールに対しての意識がどちらかが同等ではないと思うので、低い方の地域を押し上げていけるのは一緒にやった方がいいのかなと思ったりもします。悩みます。

(岩淵教育長)

はい。ありがとうございました。すでに組織どうするのかという話が、そこが一番関心の的だったりするかな。この平泉町コミュニティースクールの基本目標、この図については、ご理解していただけたかなと思うのですが、ここに挙げられている項目は現在、既存になっています。行っていること全部、それこそ包括的に一緒にまとめてコミュニティースクールという体制をつくるのだという考え方。何か新たなものを立ち上げようというものではなくてやっているじゃないかと、今これやっているよ。これやっているよ。それを一つにしてコミュニティースクールという考え方。そして、いろんな地域の方々に支援していただく、支えていただく、応援していただくという体制づくりをとという風な考え方です。ですから一番下の基盤には、今までやってきた教育振興運動というのが土台になっている。そして、やってきた実践区であれ、平泉の全世代型の平泉学の地域活動もそれに入れ込むと、それからいろんなサポートしていただいている、例えば、スクールガードから何から草刈りからですね、そういった共同活動として行っているものもそういう方々も取り込むという風に。もちろん学校教育もいろんな場面で行事でも授業でも支援していただいています、そういっ

たことも入れる。という風なということでは何か全く別な組織を新たに作ってということ、やるということではなくてという風な考え方。そうしないと、一から新たなとなるとまたそこでいろんな論議をしなきゃない。ああでもない。こうでもない。ということではどんだんだん場が多くなってしまって、そしてあれもこれもだという風なことになり兼ねないので。そこは、今やっていることを整理しながら整えていくという考え方あります。そのような説明をしていただいて担当からしてもらったわけですが、この部分についてはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。この考え方ということに。

(千葉委員)

この表、凄く見やすくいいんだけど、私的にはできれば、この上、所謂基本目標なので、上に向かって矢印はいいんですけども、行って戻るというフィードバック的なやつも考えて両矢印的な表現も有りなのかなという風なものを実は思っていたところでした。

(岩淵教育長)

担当、ご理解いただけますか？

(安倍主事)

「学校運営協議会制度との」のところですね？

(千葉委員)

目標にあって、目標について今やっているやつで、運営委員会としてコミュニティースクールとして、上の目標に向かいますよという意味だと思って見たので、いずれ実践するわけですから。それで、フィールドワークも必要だろうということで、双極の矢印という表現も一つ有りかなと。

(青木町長)

上下にね？上下に矢印が必要。

(岩淵教育長)

はい。具体的な部分でこんな活動していて目標達成する。逆に言うと目標達成のためにはこういう風な中身でやっていくよという風に、両方だと、そういう意味に捉えていいのではないか。あと図を作るのは大変すきな人たちですので、多分、教育委員会事務局皆でやり出すのではないかなと。そういう傾向があります。そこは楽しんでやるとしますので、後でまたお示しをしたいと思います。その他にいかがでしょうか。

(青木町長)

一つの考え方というか、一つ今後据えておかないといけないと思うのは、今の子どもたちが、例えば、うちの方の行政区でここ2年間小学校に入学する子どもがいないと思うんです。そういう長島の行政区なんかは特にある。そういうのを聞くんですけども、今まではどこにもどこの行政区もそんなこと考えられなかったわけですよ。そういうことで学校統合とかそういう議論になったりしていたんですけど、今度ひとつの考えで、今回のこのコミュニティースクール平泉でも平泉全体、各学校で取り組んでいただいている、その延長なんですけど、そういった行政区も増えてきているんですよ。ですから、地域で青年会活動って

やっていた地域が昔はどここの地域にもあったんですよ。ところが今はそういった組織もやっていると何か所かはあるんですが、ほとんどそういうのもなくなっている。地域で盆踊りをやるというのも、どここの行政区でも盆踊りの時は櫓を組んでやっていましたけど、今回のそういったことをやっぱり復活していくには行政区という中よりも、今回は学校中心としながら、そして、こうして集まって学校のことを語りながら、学校中心としながら地域を起こしていくこのコミュニティースクールには役目があるというか、そういう風に今後は考えていかないと少子高齢化という中で、うちの行政区では子どもたちいなければ集まりもなく子どもたちの声も聞こえてこない。逆に、長島のことを一つ例にすれば、例えば学校の中で地域のコミュニティーを広げていく役目をするのが、今まで学校、学校って言いながら、学校をこうして形づくることによって、地域のそういったコミュニティーをつくっていくという役目を果たしていくのだという、そういう部分でも目を少しずつ、今回1回にそれやりましょうというのではなく、そういった地域はそういうことも動き出しながらやっていくとまた地域コミュニティーも失われなくて進んでいくのかなと。各行政区ではできなくなったけども、例えば、平泉小学校とか長島小学校という一つの枠の中で、全行政区が参加できたりするところが出てくると、そう云うスタイルにしていくともっと地域もまた別な意味で元気になっていくのかな。子どもたちの声が聞こえたりするということは、地域が生まれ変わったような、うきうきするような声が響くことによって、笑ってくるような気が、気ばかりではなくなると思っていますので、そういった意味では考え方です。一気にそうしましよではなく、これが地域を起こしていく。また新たな原動力になっていく、その時代背景も、もしかしてあるのかなというような捉え方をですね、今後必要なのかなという今想いであります。

(岩淵教育長)

ありがとうございました。その他に、いろんな視点からどうぞ。

(本澤委員)

とても良い子どもたちが、これから育っていくのに、方法だということは確認できるのですが、ただちょっと大変なこともあるかなと。要するに、学校も地域も本当に責任を持ってこれをやって行かないと大変なことだと思うので、例えば、校長先生の、はっきり言うと地域をまとめたり、どういう人材がいて、どういう方がいて、どんな活動をしてくださっているとか、そういう学校を支える一人ひとりの方のことを校長先生が良く理解しているとか、校長先生、副校長さんも含めての方々の能力と云いますか、力が凄く大事かなと、そういう力を持った方が校長さんになっていただけないと、そんな生易しくできる、進めることではないかなと思いますし、校長さんの力が大事ということは、その上の更に教育委員会と更には町、行政の力が大事になってくると思いますが、そこが凄く今までとは違うものを何か感じます。凄くしっかりとしていけないといけないうち地域も学校も校長さんの、後ろには全部教職員もいるので先生方ももっと今までとは違う意識を持たないと、地域への見方とか、ちょっとこの十何年間、20年くらいの間に感じているのはやはり地域に開かれ

たと言葉は表現していても、先生方が地域に見当たらなくなりましたよね。校外指導とか。それから、前は月1回安全の日というのはあって、必ず子どもたちの下校路を一緒に歩いたり、バスにも一緒に乗って行って高田前住宅の前まで教師がちゃんとついて行ってどういう風に子どもが下校しているかとか。あとは夏休みのPTA活動何かで環境整備委員会とかが危険な箇所を池とか沼とかそういうのをチェックして歩くのも先生方も一緒になって歩いたりしたんですが、それだいがやってないように見かけないですね。ここ最近。そういったところ本当に教職員は意識もちょっと啓蒙、学習会等もいろいろ見通しの中に掲げておりますが、何か必要な。意識の改善と云いますか。教師も変わらないといけないなと思いました。

(千葉委員)

今のお話の中で、実は少ないながら私もコミュニティースクールについて勉強したり、調べ物をしたりしていたのですが、非常にメリットについて書いているのが非常に多くてですね、ただデメリットについて書いているものちょっと見つけたので事例何かを話しながらなんですが、実は5つあるんですが、1つは教職員の多忙化に繋がらないように工夫する必要があります。非常に開放すること。校舎内っていう開かれたという風なことをやった時に、今までなかったのが、いろんな仕事が回ってくるというのでいろいろ考えなきゃいけないというのがまず1つ。

それから、もう1つは、地域の権限が大きすぎる可能性が出るという風なことが言われております。それは、極端な話だと思うので、それはやり方一つだとは思いますが、ただ実践されているところでは、最終的な責任が学校長になるんですけども、これは平泉町さんも考えて行かないといけないのですが、教職員の人事に介入できるというところまでうたっているんで、その教職員の方々は当然県職員の方々だったりするわけですよ。なので、そこまでの権限が出してしまうと大変なことになるということが1つ。

それから、これは平泉町は大丈夫だと思っているのですが、コミュニティースクール自体に壁があるという書き方をしているのですけれども、実際に設置しても意欲や目的意識の低い地域住民ばかりだと機能しませんよ。逆に物凄く良くないことが起きたりする場合がありますのでということ言われているところが1つあります。

あとこれは、実際の問題だと思うのですが報酬が出ない、もしくは安い可能性があるということなんです。構成される人の中には、所謂学校運営協議会委員というのは特別職の地方公務員という身分になるので、あくまでも教育委員会が作成する条例の中から報酬が決まるそうなんです。その報酬の決め方は。なので、ここで言われている方は、実際にやっているところの教育委員会がお金を出す気がないだけかもしれませんという書き方をしているのですが、そういうことが一つ考えなければいけないだろうと。

最後は、関わる人の意欲に大きく左右されるので長期的な目線が必要ですよという風な書き方している。全員がやる気を持ってスタートするということは、まずあり得ないので、ほとんどの実際のPTAの方だったり、それからあとは構成員になって会議に来た人が分

かってスタートするのが非常にいいんでしょうけども、何が始まるんだろうか、どうやって関わっていけばいいのだろうか。何をしたらいいか全く分からないという状態でスタートする場合が多くて、1年経っても実際に何も起こせなかったとか、委員になっただけで自分の行動を発生しているという方で、できれば辞められてほしいという風なことが、実際にスタートしたところがかなり起きてきているという風なことが出ているので、これから全部始めるところですから、その辺のところも一つちょっと考えてということで、ちょっと見つけたのでご紹介しました。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。確かに、デメリットという点でなかなかそこまでは目が行かないとか、そういうところは見ないで過ごすとか、そういう傾向もあるかもしれません。他にありませんか。

先程、校長の人事の話が出ましたが、教職員の人事もですけれども、誰か立派な校長を引っ張って来いと言われてもそれはできない話でありまして、ですから、来た方に頑張ってもらっていただくという風なことが大事なことだと思います。ただ、このコミュニティースクールは学校の応援団という位置づけですので、応援団として何ができるかという風なことで考えていることが大事だと思います。そうでないと、学校に対して、何かこうあるべきだみたいな話でそれが中心の議題になったり、或いは自分たちの活動になったりしては、うまく回って行かないと思いますので、そこは考えなきゃいけないと思いますし、それから千葉委員さんからあった問題点の中で「長期的な目線が必要だ。」その通りだと思います。あまり勢い込んでですね、「やるぞ。やるぞ。」と花火どんと打ち上げたけど、じゃあそれでおしまい。という風になって続かないということであったり、何かこのことに疲れるとギブアップしたくなると。息切れがしてもう停滞して或いは消えてしまうという風なことにはなってはいけません。そうしたくはないと思うわけですので、そこら辺りについても十分考えて、ゆっくりゆっくりとやっていく。ですから、この平泉のこの図にありますように考え方を新たなものではなく、今やることを継承しながら積み上げていくという風な格好にしていかなければならないのではないかなとそんな風に思っています。これからでありますので、そこら辺りを考えながらという風に思うところあります。これ私の私見ですけども、小中学校3校あるわけですが、このコミュニティースクールの考え方として、小中それぞれ少し視点を変えた考え方があってもいいのではないかなと思っているんですが。例えば、小学校であれば、応援団ですので、所謂コミュニティースクールに関わる地域の多くの方々が、どう学校を支えてくれるか、支援してくれるか、どんな場面で自分たちができることが何なのかという風な私たちで関わっていただくということが基本になるのかなと。ただ、中学校の場合は、もう少し生徒全面に出してコミュニティースクールですけども、中学生が地域に何ができるかと。例えば、今やっているのでもいろいろありますよね。例えば、大文字に薪を運び上げる2年生。PTAと一緒に。今年ではできなかったですが。水かけに中神輿を担ぐ中学生。それから、ゴミ拾いに歩く生徒会。それから、ガイドに立つ3年生。それらを地域の方々

が支えていただくと。つまり子どもたち自身が地域の一人としていろんな役割を果たす。それを支えるようなコミュニティー学校のメンバーという風なこともありなのかなど。そういう風にして自分たちの地域の中でやれることをやっていくことが将来、大人となって地域づくりに関わるような人材の育成に繋がるというようなこともありなのかなど。そんなコミュニティー学校の考え方だってあっていいんじゃないかなど。ですから、発達段階に応じて、小学校にはいろんな人たちが来てくれていろんな関わりを持ってきて支えていただく姿と地域の中で自分たちができること。やれること。やってきたこと。そういったことを大人と一緒に考えてという風なかたちで将来に繋げるというそんな考え方もあっていいのかなど私は思ったりしている。そういったことも含めて、これから具体的にどうするか、先ほど出ましたように、所謂町として全体の組織があって分科会的に小学校という風なこともありということもあるだろうし、或いは各小中学校出てきたコミュニティー学校の統合体として、所謂交流の場をそれぞれの学校、実践を交流し合いながらお互いに学んで、そしていいところを取り入れながら交流して進めていくというコミュニティー学校もあるだろうという風に思います。そんなことについては今後、話し合いを現場の、或いは今、やっていただいている郷土活動に関わっていただいているとか、さまざまなかたちで学校に繋がりを持っている方々のご意見をいただきながらですね、進めていければいいかなど思ったりしているところでした。残りの時間が少なくなりましたが、何か皆さんでご意見いただければと思います。いかがでしょうか。

(三浦委員)

今、教育長さんが仰ったように、中学生くらいになるともう子ども会行事にも参加しなくなってしまったり、地域の中で、何か活動は学校の中では「こういうのある、ああいうのある。」というので参加を募ったりしますけれども、やっぱり地域の方々からも声をかけていただいたりする場。それから、今の子どもたちの社会は縦の繋がりが本当に子どもたち同士の縦の繋がり。それから、昔だと民区で、親子でどこかに出かけるというか、バスを借りて海水浴に行ったとか、そういう親子で活動は盛んに行われたわけですが、もう今ではそういうのがなくて個々で。個でも行ければいいのですが、行けない家庭もありますし、凄く横の繋がりがどんどんどんどん減ってきています。その中で、やっぱり子どもにとっては、大人の世代とか、それから自分より下の世代の人たちとの、人との関わりというのが凄く大事になってきていると思いますので、このように地域のコミュニティー学校によって大人たちもどんどん子どもたちと関わっていけるような、子どもも大人と関わっていけるような体制というのは、こちらで作っていかないと、どんどん途切れてきているなと思います。いろいろな考え方もあると思いますが、学校を応援していただく、それから子どもたちの成長を応援していただくというような活動に、組織にできればいいなという風に思います。そして、学校というのは昔から地域を結びつける核でもありましたので、今は統廃合によってどんどん学校がなくなってきて、その地域の結びつきもやっぱり弱くなってきているので、やっぱり従来の核としての学校というのを大事にしていくためにも、みんなで知恵を出し合っ

て、地域を、学校を核とした地域づくり。それから、子どもたちの成長を見守る地域づくりというのをやっぱり推進していく必要があるのかなと思いました。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。その他にいかがでしょうか。

(千葉委員)

先程、私の話で、一つでやるものと話をしたのですが、今、いろいろ聞いて思ったのですが、やっぱり中学校は中学校なりとか、地区は地区なりというのもあるので、一つとしては、所謂運営協議会委員の中身を一緒にしなくてもいいんじゃないかという風にも思いました。所謂中学校に入っただけの方はこういう人たち。小学校にはこういう人たち、中学校にはこういう人たちという風に同じ人ではなく。所謂役職、それぞれの公民館代表はこっちに入るとかという風な分け方をしていくのも一つではないかなと思いましたので、ちょっとその辺も今後考えていきたいなと思います。

(岩淵教育長)

ありがとうございます。いかがでしょうか。町長はどうですか。

(青木町長)

私の方は、組織的なお話も出たのですが、まずは構成をしっかりやっていただく。情報交換という中で、全体で年に1回とか「うちの方でこういう取り組みをしているよ。」とか、「うちのほうでこういうことちょっと心配なんだけど。」とかですね。例えば、全体的に情報交換する。そういう集まりが年に1回くらい。構成員を、長島小学校、中学校、平泉小学校、この中で伸ばしていくというか、今までの更に肉づけをしながら発展的に取り組んでいく。なにもこれを変えよう、あれを変えようと云うことではなく、それを伸ばしていくと、今のかたちが充実してくるので、更に皆さんが仰るように、中身が良い意味で変わっていくのかなと。ご期待をいたしております。

(岩淵教育長)

はい。ありがとうございました。それではそろそろ締めくくりとしたいと思います。これだけは言っておきたいという風なお話はないでしょうか。よろしいですか。それではここでまとめという風な話はいたしません。基本目標については、一定程度のご理解はいただいたという風に思います。あと、具体的な組織とか、今、今後の先の話が出ましたので、これから様々な場面で、また、この総合教育会議の中でも話題にする中身であると思いますし、学校、地域、PTAとか様々な方にもお話をさせていただきながら、意見集約をして進めて参りたいという風に思います。いずれ1年半後のスタートという風なことで考えていますので、じっくりと腰据えて周りの状況も見ながら、県内の様子も聞きながらそれぞれの地域で全く考え方が違うということもあるだろうと思います。平泉は平泉型のコミュニティースクールということで考えていっていいのかなと思いますので、また、千葉委員さんみたいにネットとかで一生懸命調べてですね、こういうメリット、デメリットがあるんだという、たくさんお寄せいただきながら論議をしていただければと思います。以上で協議の部を終了

したいと思います。ありがとうございました。

(岩渕教育次長)

ありがとうございました。

それでは、次第の大きな4番、その他でございますけれども、事務局からは特にございませんけれども委員の皆様から何かございますでしょうか。

(岩渕教育次長)

そでは、長時間に渡り熱心にご協議いただきありがとうございました。以上を持ちまして第2回平泉町総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。